

---

# ダイヤモンドの恋

愛乃 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイヤモンドの恋

### 【Nコード】

N9325F

### 【作者名】

愛乃 咲

### 【あらすじ】

初恋もまだの日野灯。高校1年生。おとなしい性格でチビだからなのか？3年のお姉さま方にいきなり囲まれてしまう。なにやら有名な彼女の彼女の「真先輩」とやらに、灯がしつこくつきまとっているらしい？そんな覚えはまったくないどころか：真先輩と話したこともないんですけど！？片思いすらしてないのにこんなんアリ！？

## 第1話　　春先にバケツ水

何で

こういう事に

まき込まれちゃったんだろう？

目の前には

綺麗系のお姉さん方が5人。

怖い目で睨んでいる。

… だけならまだいいんだけど。

「あんななんか、

真に似合わないんだよ」

「たいして可愛くもないくせに」

「真には坂田亜季っていう

れっきとした彼女が  
いるんだからね！」

口々にそう怒鳴られる。

真<sup>まこと</sup>ってというのは

学年が2年の先輩。

佐藤<sup>さとう</sup>真<sup>まこと</sup>。

頭のいい、  
ちよつと怖い感じの人だ。

人気があるっていうのは  
見ただけでわかった。

あたしのクラスにも  
ファンがたくさんいる。

あたしが真先輩に似合わないのも知ってるし。

たいして可愛くもないのなんか知ってるし…。

坂田<sup>さかた</sup>亜季<sup>あき</sup>さんだって見かけた事はあるし…。

だけどね。

真先輩は

あたしと何も関係が無いし。

そりゃ、

確かにカッコイイなあとは

…思うけど。

好きとか。

そういう気持ちなんてない。

それを言おう言おうって

してるんだけど。

ぜんぜん口を挟めない。

ひの  
あかり  
日野灯 高校1年。

どこにでもいる

平凡きわまりない

地味めの女の子。

ちょっと近眼でメガネ。チビ。

コンタクトは  
アレルギーっぽくて、  
合わない。

髪型は…

肩までの髪を  
横でひつつめてる。

色は染められない校則。  
だから。真っ黒。

何だか客観的に考えてて…  
イヤんなったくらい普通。

「ちょっと聞ってるの!？」

いけない。手が…。

目の前の  
茶髪の女の子の手が。  
上がる。

殴られる。

と身を竦めたんだ。

そしたら。

ばしゃん。

って。

冷たさと同時に音がして。

あたしは

ずぶ濡れになって、  
そこに居た。

\*\*\*

「困ったな…。」

彼女達は笑いながら、  
去っていった。

あたしはそれで  
解放された形になった。

女子トイレの個室で  
体操着のジャージに着替えて。

でも。

こんな姿で帰れない。

お母さんが何て言うか…。

心配かけちゃうし。

まるで苛められたみたいな…。

って。あれ？

これって…

イジメ…なのかな…？

喉の奥がツンって痛くなった。

ダメ。

泣きそう。



こんな

訳のわからない事でなんか  
泣きたくない。

なんで？

なんでこんなことになったの？

気にさわること、

あたし、したかな？

## 第2話　く桜井涼の来襲く

次の日はいつもの朝。

昨日あんなことがあったけど  
あたしはいつものとおりに  
登校してる。

…学校休むくらいの  
繊細さがないのは

我ながら  
どうかしてるんじゃないかとは  
思ってる。

「おはよう！」

小学校のころからの幼馴染  
なかむらしょうこ  
中村翔子。

いつものとおり。

笑って声をかけてくる。

「…あ、おはよう。翔子」

「どしたの？  
何か元気ないね？

昨日メールしたけど  
なんか返事ないし！。  
最近ノリ悪いよー。  
灯<sup>あかり</sup>」

「…あのね…」

「シヨコ、おはよ！  
昨日の宿題で  
わかんないとこあつてさあ。  
教えてくれないー？」

他の友達が  
翔子に声をかけてくる。

「いいよ！わかる問題ならねっ」

あ。また。

きつかけを無くしちゃった。

タイミングが難しいんだ。

翔子はアイドルみたいに  
可愛い。

可愛いだけじゃなくって、

性格も明るくて優しい。

これで運動もできて  
頭もイイってなったら…。

みんなほつとかないよ。

男の子はもちろん、女の子でも。

ちょっと気が強いけど。

あたしはそんな翔子の性格、  
大好き。

でも、翔子はいつも忙しいから。

あたしは深刻な話は  
タイミング失うんだ。

アイドルの曲がどうか、

昨日見たテレビとか。

そんな話なら簡単なのにな…。

だって。

昨日のことなんて。

どうしてあんな事

されなきゃいけないのか、

あたしにだって

わからない事なんだから…。

どこから言えばいいのかな。

あ。

かえってこんなトラブルの話、

迷惑にならないかな？

とか考えちゃって。

メールしてみようかな…？

『昨日、5人の先輩に囲まれて

バケツ水かけられちゃって

大変だったんだ！

真先輩に

関係があるらしいんだけど

あたし真先輩と

話もしたことなんてないのに

何でかな？』

.....。

打ってみたけど。

ダメだこれ。

暗い。

内容が内容だけに…

明るくしようが…ない気が…？

こんなん送れないや。

ホームルームが始まった。

担任の山口が何か言ってる。

だけど今日はそんな内容も  
頭に入って来なくて。

頭の芯がぼっーとしてる。

ガラッ

え？

教壇の先生が  
ポカンとした顔をしてる。

先生だけじゃなくって  
教室のみんなも。

なに？

勢いよく開いた戸に  
立っているのは男の子。

身長が高い。

色白で、痩せてて。

髪は黒くて短い。

目が綺麗<sup>きれい</sup>。

髪、脱色も何もしてないのに  
ちよつと目立つ感じの…。

「おい？お前のクラスは隣<sup>さくら</sup>だろ。  
何寝ぼけてんだ桜井」

山口先生が  
その男子生徒の名前を呼んで  
注意してる。

へえ。

隣のクラスの担任にまで  
名前覚えられてるんだ。

目立つ風貌だからかな？

何にせよ、

あたしとは違うタイプで  
世界がちが…



え？

その男子生徒は  
みんなの注目も気にしないで  
こっちに来る。

「アンタ」

…は…？

「名前は？」

え！？えええ！？あたし？

「涼、ナンパかあ？」

クラス中がどつと笑った。

やだ。恥ずかしい。  
こんなのって…！？

「るせえ、渡辺。黙ってろって」

クラスでお調子モンの渡辺君を  
軽くいなして…。

それだけでもあたしの頭は「???」でいっぱいだ！

「アンタ、ちょっと来て」

「あ、あたし…!？」

あたしの右手首を強く掴んで、  
そのまま引っ張るから。

変に高い声が出ちゃって、  
またクラスみんなに笑われた。

「桜井、コラ!？」

山口先生が追って来ようとする。  
けど

騒ぎが大好きなクラスメイト達に

止められてる。

翔子が

「何？どうしたの？」って顔で  
あたしを見てる。

あたしにもわかんないよ！！

助けて！

そして。

引きずり出されるように、  
あたしは教室を後にした。

### 第3話　く屋上少年、屋上少女く

空が高いや。

屋上に引つ張って行かれて、  
あんまり空がキレイだったから  
見とれてたら。

「名前は？」

その桜井涼さくらい りょうって男子が  
そつぶつきらぼうに言う。

「…そつちこそ名前は？」

思わずこつちも  
ぶつきらぼうになっちゃう。

名前は

さつき先生や渡辺が言ってたから  
覚えただけ。

だって！！ヒドイよ。

一時限目の授業、  
どうすんのよ。

一応ココ、進学校だよ。  
内申とかあるんだよ？

そついうので  
大学推薦とかだつて決まるのに。

サボるのなんて初めてだよ？

つい目が睨にらんでしまう。

「まあいいや。

∴ 里美さとみ、出て来な」

いいのか！？

と心で突っ込みを入れてた時。

桜井涼が『里美』と呼ぶと

給水タンクの影から  
女の子が出てきた。

「このコ…？」

里美って呼ばれたオンナノコが桜井に聞いてる。

同学年かな。

上履きのラインの色が  
1年の赤色だ。

「そう。こいつ」

コイツってなに。  
初対面なのに…。

いいけどね。

その里美って呼ばれた女の子があたしの前に立つ。

「ごめん」

そのコが小さい声で謝あやまった。

「な、に…が？」

訳がわからなくて。

あたしはそう聞いた。

「つまり！

アンタ。

昨日3年の女どもに  
水かけられただろ？

あれな、

里美と間違われてたんだよ。

身長も似てるし。

髪形も。

後姿とか似てる」

でっかい声で

桜井涼が吐き出すように  
一気にまくしたてた。

「…え。」

そう言われてみたら。

里美と呼ばれた彼女は、  
あたしとよく似た身長で  
髪も同じ長さくらいだ。

…と、言っても…。

顔立ちはハッキリしていて、  
カワイイ部類だ。

「だから、ごめんってこと。な?」

「…うん」

はあ…。

よくはわからないけど。

間違いでした、と。

へえ。間違い…。

え!?!<sup>ひとまちが</sup>人間違い!?!



間違いで、あたし。  
あんなメに！？

「と、いうことで。  
じゃあ、アンタ  
戻っていいから」

ふざけんな！！！！！！

#### 第4話 くう・わ・さ

「と

言ってやったら  
よかったのに」

呆れ顔で翔子<sup>あき</sup>が。

あたしの頭をナデナデしている。

休み時間に珍しくあたしの机にみんなが集まって来たから。

説明したら

みんなが同情してくれた。

「だよなー。何かと思うじゃん」

「いきなり

ドラマじゃないんだからさあ」

「日野が相手に  
そりゃ無いわなあ」

男女そろって  
みんなそう言うから。

ちよつとムツとなつたら。

「何言つてんの？  
灯は被害者ひがいしやじゃん」

つて翔子が庇かばってくれた。

「話聞いてみりゃ

だいたい灯が昨日。

先輩がたに囲まれた  
ということだつて。

あの真先輩に！

その里美つてコが！

しつこく付きまとったから  
なんじゃん!!

真先輩って…

彼女いるじゃんか!」

翔子。

何か怒りが倍増してないか…?

「ああ、まあ…そーだけどさ」

渡辺がしぶしぶ

納得せざるをえない勢いだよ。  
翔子。

「そうだよ。」

灯は放課後、

山口に呼び出し

くらってんだよ?

誰のせいだってば!」

そうだよ。

きつと説教くらうよ。

何でこんなことに…。

「誰のせいって…。

そりゃ、小林里美のせい？」

渡辺がスパツと言つてのける。

「小林里美？そのコ」

クラスメイトの風戸美弥<sup>かざと みや</sup>さんが  
遠巻きから声をかけて来た。

「あのコ…小学校同じだけど…。

あんまりいい噂聞かないね。

日野さん、大人しいし。

あまり

近づかないほうがいいね」

「噂？<sup>うわさ</sup>どんな？」

翔子が問い詰めたけど

「いろいろ。

まあ、いろいろよ。

悪いコでは

ないんだろうけど…」

風戸さんはそう言って。

深くは教えてくれなかった。



第5話　くそして少女は脱兎するく

放課後の生徒指導室。

説教くらす時はいつも

この階段の上にある小部屋。

ここの学校はそういう造りで。

そういう方針らしい。

それはそれで

仕方ないこと

…なんだろうけど。

だけどね。

担任の山口が軽い口調で  
お説教文句をつらつらと  
述べている。

先生にしてはまだ若いから、  
これで済むけど。



問題は。

「だからな、

だいたいの事情は

中村から聞いたが…。

日野。

お前もな、

ホイホイ着いて行くこと  
ないだろう？

そして何よりお前だ！桜井！」

「あーい？」

何でコイツ。

桜井涼が一緒なのよ！？

何で？

「つたつて、先生。

俺、1組っしょ？

何で2組のセンセが指導すんの。  
おかしくない？」

「バカ。

これで済むならヨシとしてくれや。  
1組の担任の山崎先生なら  
もっと厳しいだろうが」

「そりゃあそーですケド」

「ハイ。反省文提出な。  
1時間で書けよ。  
後でまた来るからな」

と山口先生は  
扉を閉めて出て行った。

「はぁーい」

つてオイ!!  
2人つきりですかいつ。  
山口先生!!

「……………」

「……………」

気まずい。

生徒指導室は  
陽あたりがよくて。

空気がゆっくりと流れて。

おまけに静か。

「……………」

って静かすぎるでしょ!?

あたしのシャーペンで  
反省文書く音しか聞こえない  
ってどういう事?

がばつと勢いよく顔を上げると。

桜井は  
机に突っ伏して眠っていた。

「……………何だコイツ……………」

桜井の作文用紙  
チラリと見ると。

何も書いてない。

え？寝る？

それで、眠れる！！？

何て不マジメな奴…。

あたしは呆れた。

軽蔑ってあんまりしないけど。

この感情は…  
ケイベツしたって感じかも。

だって。

こうなっただのはそもそも。

小林里美さんってコのせい  
かもしれないけど。

そもそもはコイツが  
教室に乗り込んで来て。

あたしを屋上に  
引っ張って行ったから  
じゃんか。

… あたしなんて。

根源<sup>こんげん</sup>は何が悪いかなんて  
わからないけど。

着いてったのは  
(いくら引っ張られてムリヤリでも)  
あたし自身だから。

そついうのがいけなかったなって  
思っで。

授業は

途中からになっちゃうし…。

ノート取るの遅れて、  
翔子に借りなきゃで  
迷惑かけたし。

腑<sup>ふ</sup>におちないけど。

一応反省はしてて。

ちゃんと文章に書いたのに。

髪も黒くて。

マジメな人に見えるのに。

何だか…態度はだらしない。  
たいど

だけど。

何でこんな奴。

山口先生には  
可愛がられてんだろう。

そっいや1組って。

特進クラスじゃん。

頭もイイのに。

なんで？

「うわあ眠っちゃった！  
今何時？」

いきなりがばつと起きて、  
騒々しく叫ぶ。

あたしは反射的に  
びくつとしてしまった。

「ね、ね、今何時？

俺ぜんぜん書けてねーの。  
何書いた？ちよつと見せて」

あたしのペースには  
かまわずにそう言つて、  
桜井はあたしの反省文を  
奪った。

「あ、名前。

ひのサンっていうんだ？

コレ、あかりつて読むの？

あかりちゃんかー。

なあ、見せてもらつていい？  
ちよつと文章変えて書けば  
時間にまにあ……」

あたしは作文用紙を  
無言で奪いかえした。

だって！

だってこれは  
あたしが書いたものだ。

あたしのだ。

「え」

少しムツとした顔で。

桜井はあたしを睨<sup>にら</sup>んだ。

こ、こ、こ、怖くなんか  
ないんだからねっ…。

「…やんとっ  
…じぶんでっ…か…」

怖くなんか無いんだからっ。



「か？」

「か、か、…かいたら…？」

なんで？

たったこれだけ  
睨まれただけで

相手、男の子だから。

体格、デカイから。

あたし、チビだから。

だから？

なんで。

泣いちゃうんだろう。あたし。

「げ」

桜井はちょっと怯<sup>ひる</sup>んで。

おたおたしてる。

そして深くため息をついた。

「アンタさあ？

そんなくらいで泣く？ふっ？

名前だっけ口きけんなら

里美の前で言えよ。

聞いてたんだからさ。

そこで泣かれたら

こっちが悪モンみてーだろ。

つまんねえヤツ。

クソマジメすぎんだよ！」

桜井は吐き捨てるように、  
そうやって言う。

…何だよ。

何だよ。

何なんだよコイツ！！

手が震えてきて。

思わずあたしは

「何だよ！

あたしは昨日から…

訳わかんないことばかりでっ。

あたしが迷惑してんだからっ。

迷惑かけたのは

そっちじゃなか！

sonでこんなこと  
なってっ…。

何でそれで

怒鳴られなきゃなんないわけ！？

そつちだつて

里美ちゃんだか何だか  
知らねーけど、

かわりにアレコレ  
動いちゃって！

そんなん…

本人に任せとけば  
いいじゃんか！

彼女でもちよつと  
かほこ  
過保護すぎんじゃないの！？」

一気に怒鳴りかえしてしまった。

最悪。

最悪だ。

あんまり怖いから。

あたしはその場から逃げだした。



第6話　くそして少女は自己嫌悪・なににどうして恋相談く

嫌になる。

この委員長長体質？

（って言っても。

しがない保険委員）

イイコちゃん体質？

優等生？

頭力タイ？

マジメ？

オトナシイ？

自分でイヤンなる。

あんなん。泣かずに普通に言うコトじゃんって。

『こっちが悪モンみてーだろ！』って桜井涼の言葉。

アタマん中ぐるぐるしてる。

図書室で、

翔子の部活が終わるのを待ってみる。

いっしょに帰る約束してたし。

それに…こんな感情。

どうやって整理したらいいか。

喋って少し楽になりたい。

本を読むフリして少し泣いた。

そんな時。

「ね、日野サン…?」

隣に座る女の子がいて。

そのコは小林里美ちゃんだった。

「日野サン、だよね…?」

「あ…今朝の」

「うん。

あたし小林里美。

サトミって呼んでいいよ」

「う、うん」



ちちゃくて。

華奢<sup>きせ</sup>で。

似てるのはそのくらい？

どうしてこんなカワイイコと間違っんだか。  
先輩たちって。

「涼くんが何か言っみたいで。  
ごめんね」

「え？」

何で知って…？

顔が赤くなる。

ああそうか。

彼女サンなんだっけ…？

「ちょっと相談にのってくれるかな…?」

「え?」

里美ちゃんが急に話した内容は。

あのね。

あたし涼ちゃんと付き合ってるのね。

それは入学式のあと、  
涼さんに告られてね。

何となくだったんだけど…。

やさしいし。

付き合ってたの。

よくあるよね?

そうなの。

でもね。

あたし。

初めてあたしから好きな人が出来ちゃって…。

それが真先輩なの。

だけど

あっちにも彼女がいて。

あたしにも今彼氏がいてね。

それでも真先輩、

あたしがいいって言うてくれてるんだ。

だから

いつかは涼くんに言わなくちゃって。

そう思ってるんだけど。

なかなかそのキツカケが無くて。

こんなことになっちゃってるの…。

それで灯ちゃんに迷惑かけちゃって…。

謝りたくて涼くんに相談したら。

涼くんってちょっと向こう見ずだから。

だから、ね。

今朝みたいなことになっちゃって…。

ごめんね。

それで…。

「あれ。今、何時？」

「え？」

「話の途中でごめん。」

あたし

翔子といっしょに帰る約束してて。  
もう時間に……」

「……帰っちゃうの……？」

里美ちゃんが涙ぐむ。

え。

困ったな。

「ちょっと翔子にメールするね」

「いいよ。」

そうだよ。

今日はメールして、断っていいよ。

里美の話

聞いてくれるって言ったんだし」

「え」

そういう意味で言ったんじゃないんだけどな…。

翔子に少し遅れるっただけメールしようとしてただけ…。

「里美、  
すごく…困ってるんだ」

里美ちゃんはそう言って、  
大きい瞳からポロポロと涙をこぼした。

「な、泣かないで！

わかったから」

仕方ないな。

今日は付き合うか。

翔子には断りのメールをいれた。



第7話　くそして親友、アンタもかく

『ねー。』

今日は  
どうしちゃったのー？

あたし、  
話したいこと  
あったのにい！』

翔子が携帯の電話口で  
そう訴えてきた。

もう時間は夜で11時。

あたしは自分の部屋で  
宿題やってた時だ。



「ごめん！

ちょっと…

いろいろあって…。

あたしも話したいこと  
あったんだ」

何から言えばいいのかな。

『もー。何だー？

恋バナ？さては恋？

付き合い悪いもん！最近。

さーてーはあ、恋だなあ！？』

「違うってばー。

もー

翔子はすぐソレなんだから！

なにから

話したらいいのかな…。

そーいや。

翔子の話って何？  
そっち先にしよう。

話あったから  
電話して来たんでしょ？」

『うん…。実は…ね。』

「何？なに？恋かな？」

ひやかしてそう言ったら翔子は

『ピンポーン！』

あたりです。

1等賞です』

そう言っ  
て。

『あ  
たしね、

佐藤真先輩のこと

好きなんだ！』

明るく笑つて。

そう言っ  
た。

「え。

さ…とう まこと

……真先輩！？」

ダメだ。

あたしの話は…

…今日の話は…

言えないっ！！

「真先輩って…

す、好きな人いるんじゃない…」

『わかってるよー！

彼女いるじゃん。

坂田亜季さんっていう3年の『

そ、そうじゃなくって…。

いや、そうなんだけど。

噂の彼女さんは

さかた あき  
坂田亜季さんっていう

陸上部で

マネージャーしてる人。

美人で長身で

オンナノコ達だって

憧れてる先輩で。

でも真先輩って。

里美ちゃんの話だと…

……。

里美ちゃんのことを…。

『美人の！

大人っぽい！

3年の！

真先輩より年上の！

彼女！

でも

好きになっちゃったんだもん。

しょーがないじゃん…』

何だ？

この展開は…！？

『ねえ。

モチロン 灯は…

協力してくれるよね？ねっ！？』

第8話　く真先輩、ナニモンだ？く

美女ばかりを惑わす

佐藤真先輩とは。

ナニモンか？

校内の有名人。

ルックス最高。

ちょっとハーフかかってんじゃないかな。

頭良し。

何か学校設立以来の成績だとか…。

塾も行っていないのに

全国模試でヒトケタの成績だとか。

陸上部の短距離エース。

何でも？

バレンタインには

チョコレートがダンボール一箱は届くとか。

いろいろ伝説にことかかない。

なんか？

中学の時の修学旅行では  
有名モデル事務所にスカウトされたとか。

でもそんなんは  
まるっと興味なくて。  
断ったらしい（！）とか。

ここは田舎でちっちゃな市なんだけど、  
市長さんのお孫さん。



お父さんはでっかい建築業の…。

つまり地元では有名なお金持ち。

都会に出ると

ケタが違う人はいるんだろうけど。

生まれ育ったココでは  
影響あるんだ。

でも。

あたしは性格なんて知らない。

ただクラスの女子みんなで、  
いっしょに遠からきゃーきゃー言ってるだけで。

だって世界、違うじゃん。

ああいう人は  
遠くで憧れるから楽しいんだし。

学年違うし。

中学だって違う。

オンナノコ達は頑張ってるよ。

いろいろプレゼントとか。

色じかけの誘惑とか。

されてるって聞いたけど。

何だか特定の彼女サンがいるから  
他のオンナノコには  
見向きもしないって噂。

どっかの高校の  
ミスなんとかサンが言い寄っても  
振ったらしいし。

だから  
よけいに人気、あるんだよね。

彼女の坂田亜季さんだって校内では有名人だ。  
綺麗で優しくて。

ちよつと大人しくて。

頭良くて。

背の高い、キレイなキレイな人だ。

生徒会長などもしてたり。

家は普通のサラリーマンのご家庭らしいけど。

でも2人セットで憧れてるコも多い。

あれ。

翔子に協力って…。

あたし何すんの？

あんな人。

翔子に振り向いてくれるのかな？

いくら翔子でも…。

『だけどあたしがいいって言ってくれて…』

あれ。

たしか里美ちゃんは  
そう言ってた。

…ってコトは…。

真先輩と亜季さんは…

別れちゃうの…？

ええええ！？

何が不満なんだ亜季さんの！？

っというか…。

里美ちゃん…。

亜季さんより里美ちゃん？え？

……。

似てるところ。

似てる…ところ？

お、大人しい…ところ？

?????

あたしの頭の中は謎だらけだよ…。真先輩。

第9話 くたったひとつしかない初恋く

「春って。」

イベントがないんだよね……」

次の日の放課後。

校庭の隅っこで

陸上部の練習を見ながら。

翔子がため息をつく。

「うん。」

イベントって

全て冬だよな」

せめて

バレンタインとか近かったら……。

とか思いつつ

そう答えたら。

「だからこそ！

敵も少ないと思うの！」

力こめて翔子が言った。

…そう来ましたか…。

翔子はポジティブだなあ！

好き。

好きって。

憧れと

何が違うのかな。

「ねえ翔子」

「なに？」

「なんで、

好きなの？」

聞いてみた。

だってなんか。

イヤだったんだ。

あたしが大好きな翔子が。

強くて、

可愛くて、

優しい翔子が。

他の女の子みたいに

ルックスが好みだとか

そういうトコだけ見て

『好き』って

思ってるんだとしたら。

なんかイヤだったんだ。

「理由なんかないよ」

「え？」

「そりゃ…。」

はじめはただの

ミーハーだったよ？

でも あたし。

話もしたことない人。

きつと好きになれない。

今までだって

そういうのって…



あたしに告ってくるヤツ、  
断ってたじゃん？」

「話、したことあるの！？」

翔子が

今までどれだけモテて来たかは  
もう知ってるから、  
ソコはひっかからずに。

真先輩との接点があるのに  
驚いた。

「あるよ。

あたし、

入学式で宣誓読んだじゃん？」

宣誓っていうのは…

入試でトップだった生徒が  
読むアレだ。

「無理してさあ。

受験勉強してさあ。

あたし、確かに

超マグレでトップだったさあ。

だけど。

世の中には  
いるんだよね…。  
無理しなくても  
デキル人つてのが。

次のミニテストで  
バレちゃって。  
アタシの頭のレベル。  
氣いぬいたら  
すぐ成績なんて落ちた。

でも。

ちよっとうかれてたんだ。  
自惚れ？  
うぬぼ

つての？  
そういうの…  
見る人が見たらわかるんだよね…。

廊下で  
すれ違いざまにさ。

『イイ女がいると思ったら。  
違ったな』

つて

イヤミ言われて。

何だよソレ。  
ふざけんなって  
アンタに  
あたしの何がわかってんだ？

って

くってかかったら」

ちよつと待て翔子。

なぜソコで。

売られたケンカを

直後に買うんだ？

あたしが頭を抱えていたら。

翔子は

ふつとキレイな表情で笑った。

「『はいはい。』

『いい女になんなさい』

って

頭ポンポンってされて

それが

真先輩だったんだ。

イヤになる。

まるで子供扱いなんだもん……」

翔子がシュンとして。

ホントに子供みたい

体育館横の石階段ににうずくまった。

「でね。

何を間違ったかあたし…

体育委員に選ばれちゃって。

そしたらね。

真先輩もそうで。

しよっぱなの委員会の書類で  
ちよっとトラブったのね。

そしたら。

何も文句言わないで。

助けてくれたの。

それから廊下とかで会ったら

声かけてくれるようになって。

なんとなく、立ち話とかしてたら。

そしたら。

なんとなく、ね」

……。

ふーん。

翔子の何度目かの恋は。

そうやって『なんとなく』

はじまったのか。

「なんか…。

みんな  
女の子なんだねえ……」

「……。」

灯？

何でそこで枯れてんの！？

アンタだって

オンナノコでしょ！？

これから

初恋のひとつやふたつするのっ！！」

すつくと立ち上がって

勢いよく翔子がそう言い放つから。

「……翔子。

初恋ってのは。

たったひとつしかないから

『初恋』っていうんだよ……」

と、あたしは答えた。

第10話　それは略奪愛妄想計画

略奪愛。

なんか書くと

…お昼のメロドラマ…

みたいなの？

とにかく翔子のレンアイは  
略奪計画なのだ。

敵は

亜季さんに里美ちゃんに。

校内に多数いる  
ファンどもなのだ。

あたしは翔子といっしょに

ノートを開けて  
もくもくと計画を考える。

「だからー。」

何でノートに書くのよー。

勉強違っんだからあー！」

はじめ翔子は異論をとなえた。

だが！

「へたに人にみつかったも  
ヤバメだから。」

ちゃんと

AさんBさん  
って書くの。

それにね。翔子。

こうやって  
書くことによって  
目標が定まるのよ。

受験と同じよっ！」

同じかどうかは確信はないぞ。

でもなんか。

弱ってる翔子は  
らしくない。

だからつい力<sup>じき</sup>んじゃう。

ノートには

翔子がカワイイ文字で  
思いついたアイデアを書いていく。

「敵は多いんだよ！  
やるならしっかりしな！」

そばであたしは励ます。

励ましになっているかいなかは、



…どうだろうか…

「なんか！

ちがう！

いや！

なんか

乙女ちがう！

青春ちがう！

ピチピチしてない！

キャンキャンしてない！

なんてゆうか…

ヒューヒューしてるってゆうかあ？

歴史小説ホコリっぽい  
ってゆうかあ？

灯って

…策士？策士？」

「何をいまさら。

恋愛だって

方程式や

攻略法や

心理学が関係してくるのにちがいないわ。

まちがいないんだから！」

あたし。

本当か？

「うーん。

そうなのかもねえ。

やだ。

どうしよう。

計画書ただけで

もう成就しちゃいそうな気が…」

それでも

どこか素直な翔子は

一心不乱に作戦を書いている。

「甘いよ。」

気になっただけじゃあ

甘いのよー」

何だか楽しくなってきた。

わかっているさ。

机上の空論だってコトは、さ。

だけど翔子も楽しそうだ。

「ねー、もしね。」

もしもよ？

成就なんかしちやって

付き合うよーになったらさあ！

あたし

絶対元カノさんに  
恨まれるよねえ…？」

妄想話でもりあがる。

「ソコが心配なんだけどね。

こういうのって

本人より…

友達が厄介だよね…？」

「え？」

「漫画やドラマでは

元カノがすごいヤな性格で。

よく復習劇に出たりするよね？

でも。

あの亜季サンがそんな人に見える？

あたしの勘では

あの人はそんな人ではない！

だけど

亜季さんの友達は厄介よ。

だつて…あたし…

囲まれたし！

バケツ水

かけられたし！！！！

人間違いだつたけどねっ」

あ。

なんだかこれじゃあ…

あたしの復讐みたいだ。

イヤな感情に気がついて。

言いながら、ちょっと

あたしはへこんだ。

「…そうかあ…」。

今はいっぱいいいっぱいで。

そこまで考えてなかったよ。

なんか…。

険しい道のりなんだ。

あたしの恋」

それでもなんだか  
ひどく翔子は納得している。

「うん…。  
ハードル高いよね」

「障害物競走なんだあ…」

「先輩は短距離種目なのに…」

そう言い合いながら。

恋愛からほど遠い話になっているのに気がついて。

顔を見合わせて、  
あたし達は笑った。

第11話　～夜中、アカリは絶叫する～

そうやって  
浮ついていられる時間だって  
限られているんだ。

あたし達は勉強をする。

2年になるまでに  
理系か文系かを選んで。

3年は行ける中から  
まだ行きたいかなーって大学を選んで。  
ずっと大学受験に備える。

あたしは何になりたくて。

何になれるんだろう。

最近科目ごとに

ミニテストが増えた。

追いていかれないようにするだけで  
せいっぱいだ。

大人になるって…

みんなこうやってガマンして。

詰め込んで。

あたしは要領悪いから。

なんか…。

テレビドラマに出てくるような

ものすごいキャリアなんかはつめなくて。

ヒロインっぽい

クールビューティーとかなんか

絶対無理だよなあ。



隣の席の男子、

浜田が大声を出す。

「数学のノート、

提出お願いしまーす！」

浜田の『は』と、日野の『ひ』。

あたしも日直だったから、

何だかこういう雑用まで任される。

苦手なんだけどな…。

「ひのちゃん。

俺、部活急ぐの！

悪い。

ノート、

職員室まで持ってつてくんね？」

こういう時だけ、

なれなれしく浜田が甘えてくる。

何で男子って…

こーもコドモ？

あたしが大人しいからかな。

可愛いわけでもないし。

だから態度、こんなん。

なんで、もっーオトコって。

相手によって態度こんなにロコツ？

「しかたないね。

…いいよ。

集めてくれたの、

浜田だし…。」

「じゃー、よろぴくー！

日野ちゃん、  
マジメで助かるー」

何がよろぴくだ。

ニホンゴ喋れ。

…と。

言える性格なら楽だよねえ。

それでも浜田は悪意ないから。  
まだ楽だ。

アレはアレで  
あたしが大声出すのとか  
苦手なのを知っていて。

さり気なくフォローはしてくれてる。

フォローだけなんだが…。

それは許せるくらいで。

もつとひどいヤツになると、  
まったく作業にならない。

…このクラスは…  
そういう人は、いないかな。

渡辺くらいか！！！

ま。

『ひ』のあたしには  
『わ』の渡辺は  
関係ないからいいけど。

それに。

渡辺の日直相方は  
矢野さんというハキハキした女の子だから、  
がんがん言いくるめられてる。

何というか。

女の子は総じて  
しっかりしてる。

「よいつしょつと」

2組の42人分のノートは、  
少しだけ重い。

「ん？」

「いち、に、さん…」

…ノート…

一冊足りないんですけどお…？

もしかや と思い、

最後のノートの表紙、名前を確認したら。

あーあ。

やっぱり『渡辺』だ。

ヤツは

提出してねええええ!!

.....。

そこまでは日直の仕事じゃないし。

数学の宿題。

数学教師の畑山は

∴ 学年主任で∴ 超厳しい。

けど。

そんなん

あたしのせいじゃないし!

職員室について。

ノートを左手で支えて

何とか引き戸を引こうと格闘してたら。

ふいに戸が開いて

先生（誰か見えない!!! どうせチビ!）が  
出てきたもんだから。

クラスぶんのノートと  
あたしの鞆。

廊下にバラまいた。

「……どういう器用な落とし方をしたら。

こうなる？

日野よ……」

ちよつとトボけた声で、  
体育教師の秋山ちゃん（41歳男性・既婚者）が  
あたしに声をかけた。

同情するなら

手伝ってくれええええ。

そして夜。

自宅。

部屋で。

お風呂あがり。

あたしは気がついてしまった。

できれば

気がつかないままが幸せだった。

背筋が寒くなる事実。

翔子から預かっていた  
ピンクの表紙の



『略奪計画ノート』が…

カバンにないっ!!!!

## 第12話　く非常階段の命令く

いつもの

何も無い1日がすぎて。

1日中

ノートがどうなっているのか  
気にして。

でも

何もなくすぎていく時間に  
ただ失くしたただけで  
とくに

何があるって訳でも  
無いのかもって。

ただの散文さんぶんだったし。  
って。

そう思えばはじめた放課後。

「ちよつと来てくれない？」

最悪なヤツに  
ひじょうかいだん  
非常階段に呼び出された。

桜井涼だ。

「イヤ」

そう短く言って  
突っぱねようとしたら。

「これ

オマエんのだろ

アカリチャン」

桜井の右手には  
あのノートがおさまっていた。

何で？

何でよりによって

桜井涼が

あの『略奪計画ノート』

持ってソコにいるの？

「かえして！」

手を伸ばして

ノートを取ろうとしたけど。

身長差がジャマをした。

「オマエって

真センパイのこと

好きなんだ？」

耳元で桜井が囁いた。  
さくらや

「何言ってるの！？」

ぎよつとした。

あわてて辺りを見渡して

誰も聞いてないのを

確認してから

「行くから！

非常階段！

…だから静かにして」

ちつちやな声で  
あたしはそう言った。

\*\*\*

「そのノート…  
返して」

何で

あたしはそんなノートの表紙に  
律儀にフルネーム  
書いていたんだろう？

後悔ばかりだ。

授業で使うつもりだったから。

だからだ。

「レンアイに興味ありません  
って顔して  
なんかエグいよな

オマエ。

彼女であるアキから  
真センパイ  
略奪しようって？

やめとけやめとけ  
叶いっこないから」

「何言って…」

そこで思い出した。

そのノートの中にだけは

名前が書いてない！

「ほんと意外」

意地悪そつな表情。<sup>かお</sup>

イヤだ。

コイツ、

あたしにいい感情  
持っていない！

「アンタ  
俺の言うこときけよ」

それって  
どういう…意味。

「今  
アカリチャン  
どういう状況わかる？

入学してそうそう  
真の彼女のアキ  
そのオトモダチに  
バケツ水かけられたよな」

「あれは  
人違いだったじゃん！」

そう。  
あれは  
里美ちゃんと間違われて。

「だけど、だ。」

ヤツらに

その誤解は解けてない」

「え？」

ぞつとした。

そうだ。

里美ちゃんには

謝られたけど。

だからって

そんな理由は

亜季さんの友達の

彼女らには…

伝わってるわけが

ないんだ。

どうしよう。

足が震えた。

「あんた…。」

亜季さんの



なに…？

名前

呼び捨てするくらい  
仲いいんだったら…  
説明してくれたら…」

「何で？」

「だって  
仲いいんでしょう！？」

「家隣だから。  
昔から仲はいいよ」

「だったら」

「だけど  
なんで俺が誤解とく必要  
あんの？  
わざわざこっちが？  
何の義理あつて？」

意外と  
間違いじゃなかったし？」

だから、それも！

真センパイのことを

好きなのは

あたしじゃなくって

翔子…

…。

そんなん。

言えないじゃん…。

コイツにそんなこと言ったら。

今度は翔子が…

からかわれて…。

真先輩を好きなこと  
バレて。

翔子が恥をかく…。

今からなのに。

まだこれから

翔子は頑張らなきゃ  
いけないのに。

「……」

「なに？」

また泣くの？」

握り締めた拳。<sup>こぶし</sup>

コイツの腹に

思いつき

くらわしてやりたい。

けど。

顔を上げた。

「泣かないわよっ！

誰が泣くのよっ。

泣いてるヒマなんて  
ないのよっ！」

桜井が少し

呆気<sup>あっけ</sup>にとられた顔をした。

「何でも！

アンタの言うこと

聞いてやるうじゃないの！」

あたしは高らかに

声をはりあげて宣言した。



第13話 くダイヤモンドの原石く

「いや

だからって…

アンタ…

色気ねえな」

なぜ言い出した張本人、  
桜井が困る？

「もうちょっと

……。

っていうか

かあなありい！

何とかしてもらわんと」

「なに？

ノートくらいなら

いくらでも貸すけど？

ノートって言っても

“それ”以外のだけど

言うこと聞くから  
そのノートは  
かえしてよ？」

どうせコイツ。  
授業中。

寝てんだろうし。  
そんな気がする。

渡辺と同じニオイがする。  
アタマはいいくせに。  
ノート提出時  
困るクチと見た。

「……。

それに。  
ガキ」

桜井が  
冷めた声で呟く。

あんたに  
言われたくないし！

妙に腹が据<sup>す</sup>わってきて  
クールにそう心で突っ込む。

言えないけど。

「俺の指令

全てこなせたら

ノートは返してやる」

桜井が不適に笑った。

「ほんと！？」

でもあたしは

それで

少し安心した。

でも。

待て。

指令って何だよ。

奴隷かよ。

下僕かよ。

手下かよ。

…それに近いモンは  
あるのか？

…。

選択を

誤ったかもしれない…。

だけでもう

そんなこと

言ってられない。

「これでもあたし。

もうすぐ

誕生日なんだよ」

それを聞いた桜井が  
怪訝けげんな顔をしてる。

なんで？

「……。

メガネ取ったら

実はカワイイとか？」

「やだっ。

なにすんの」

メガネを外される。

「…び、微妙びみょう？」



「なにが!？」

失敬<sup>しっけい</sup>だなっ！

視<sup>しかい</sup>界がボヤけるから。  
やめてほしい。

「そうか。

そんな

古典的少女マンガ展開は  
ムリムリかつ」

「なんで

うなだれるのっ!？」

桜井が

あたしにメガネをかけながら  
肩を落としてうつむくから。

「あー

うー

まー

そのー

アレだな

オタク共が好きな  
萌え系とでも…

ムリヤリ

思い込んだら

……。

…何か？

俺の好みじゃ

ねえけど…。

原石と思いこめば  
ナンとか」

急に

階段に座りこんで  
考えこみ始めた。

何、思考迷走しじょうめいそうしてんだ？  
コイツは？

原石。  
げんせき

それで思い出した。

あたし、  
もうすぐ誕生日だ！

「あたし、  
原石だよ」

「あ？」

「誕生石  
ダイヤモンドだもん。

でも

まだ成人してないし。  
ダイヤと違って  
まだ似合わないし。

恥ずかしいから  
原石だって  
思うことにしてるんだ」

「それだ！」

「なにっ!？」

桜井がぱつと  
あたしを見上げて  
指差した。

「オマエ、今。  
若いつつーたな？」

そーだよなー。

何か1つくらい

イイとこないとなあ  
やってらんねーし」

勝手に何か

納得されてる。

若い？

そんなこと

言ってないぞ。

じっさい同学年だと

4月生まれって

歳1コ違うじゃん？

ただ

誕生石のダイヤモンド。

似合わないって

言っただけで。

あたしとしては

…なんかもう高校生で  
歳くった気が

してんだけど？

「  
…桜井も

若いじゃん

同学年だよ？」

「若いから

いろいろあんじゃねーかよ」

そう言つて笑つた桜井。

でかい図<sup>ずうたい</sup>体して

コドモっぽく見えて。

何だ。

コイツ、

けっこう

イイヤツ？

少しだけ

そう思つて

笑えたんだ。

## 第14話 く怪しい指令

日曜日。

本当は塾があつたんだけど。

携帯メールに昨晚  
指令が来た。

とうとう来たか…。

だけどその内容で  
あたしの携帯を持つ手は  
怒りで震えた。

『自分の貯金通帳

カード持って

斎木公園 朝10時集合』

カツアゲか！

こんのお不良がつ。

金か！？

すんげえ遠回りな脅し。

怒り心頭で

それでも一応行ってみる。

額によるけど

イザとなったら警察行く覚悟だよ。

公園まで歩いて行くと

居た。

桜井涼だ。

ベンチに座ってキョロキョロしてる。

「来たけど？」

すごくイヤな目で睨みつけてやった。

「ジーン…」。

「……はあ」

なぜソコでため息！？

気分悪いのはこっちですが！

「……まあいい。  
行くぞ」

「つて。

いくらいんのよっ？

場合によったら

あたし

警察行くからねっ」

「ケイサツ？

また妙なコトを…。

あー。

手始めはまず

5、6千円つてとこだな」

「そんだけえ？

肝がちっさいな。

通帳カードじゃなくっても

お小遣いで足りるじゃん！」

怒ってるから。

あたし。

バンバン嫌味言える。



「は？」

「はいっ！」

これで終わりにしてよねっ。  
ノートは？」

5千円札おしつけて。

手を出す。

「俺に払ってどうする！？」

はい？

「ああ！  
なんか誤解してんだろ？」

誤解ちがうもん。

「いいから  
着いて来いって」

先に早足で歩きはじめるから。

あたしは慌てて着いて行っ

その日の1日の行動…？

……。

なぜか眼科に行かされて。

使い捨てコンタクトを購入。

（もちろんあたしのお金で）

その後、カードでお金おろして…。

「…オマエ…」

この額はなんだ？

貯めこんでんなあ」

とやたら関心されて。

5万円卸されて。

そのお金で

（しつこいけどあたしのお金だ

今までのお年玉とかで  
30万ある  
親類多いから  
あたしン家)

美容院行かされて。

何か知らんが  
勝手に髪型決められ。  
少し色まで！  
染められた。

「こんくれーバレねっーて」

桜井は楽しそうだ。

「次！時間ねえから！」

もう夕方の6時だったけど。

次は…  
なんか？  
高そーなブランドの店に連れて行かれて。  
…高いっていつでも  
超高級って訳じゃないけど。

あたしにとっては  
高い  
っただけの。

洋服。

たくさん。

買った。

（いい加減しつこいけど。  
あたしのお金だ…）

「指令1。  
完了な」

やたらご機嫌で。

桜井は笑ってた。

……………。

これは

なに？

\*\*\*

ファーストフードのお店で  
いっしょにバーガー食べながら。

「この労力、わかるか？  
オゴレ。

これくれーはオゴレ。  
コレ指令違うが  
少しは労われ！」

うるさいから。

「奢<sup>おご</sup>るから！」

そう言つと

やっと静かになった。

「でも…  
なんで？」

聞いてみた。

だって理解できないんだもん。

「あー。」

少しは考えろ？

ま

少しはコレで

マトモに女に見えるだろ」

意地悪言っ。

そのすぐ後で

「けっこー可愛いじゃん」

って。

マトモに正面から言われて。

あたしはユデダコみたく真っ赤になった。

そしてその日、家に帰って。

何だか桜井って。

オンナノコの扱い。

慣れてるな。

ってそう思っで。

だっであたしが  
楽に話せる。

変な奴。

っで。

買った服を眺めた。

第15話　く大魔王と部活、入門く

月曜日。

朝、翔子と会うつ。

目を真ん丸くして

翔子があたしの頭をくしゃくしゃにした。

「せっかく髪結んできたのにつ」

「だあつてえ！

髪型、

カワイくなつてんだもん！

下ろしときなよ！

このほーが

かわいいってば！」

翔子がゆずらないから。

しかたなく…。



廊下でポンツて  
翔子の頭、  
後ろから叩かれた。

「今日も色ペー足してんな  
オマエ」

「また何言ってんですか！  
もー

真先輩ってば！」

翔子が軽く怒って  
その人にやり返してる。

うわっ。

ナマ真センパイ。

こんな間近で初めて見た！

背、高い。

カッコイイー。

……。

でもナンカ。

幻聴か？

今の？

「惜しいなオマエ

もうちよつと胸育てろよ

何なら揉んでやるぞ？」

だから。

さつきから

幻聴が聞こえるんですけど？

「いつでも受けて立ちますからっ！」

翔子が元気よく答えている。

「ばーか。

オンナはコト足りてんの」

「もっー!!」

ちよつと怖そうな  
でも爽やかな外見から。

毒舌…  
っていかむしろ

エロエロ大魔王な台詞が  
ポンポン出てくる。

「しょうじ…？」

翔子！  
」

「なに？」

朝から幸せそうな翔子ですケレドモ。

「今の…  
真センパイっ！？」

「そうv  
朝からラッキー」

…そうかあ？

今、あたしの中で  
何かが壊れたよ…？

「でも。

コトタリテるんだ。

ほんとに…。

嫌んなっちゃうよねえ？」

翔子が寂しそうに笑った。

「そっいゃ。

計画なんだけど」

切り替えて

翔子が明るく言う。

心臓が飛び跳ねた。

ノート、無いから。

「まず情報収集すること。」

って書いたのよ。

ノート持って来た？」

「！！」

……忘れちゃ……」

凄い緊張感だったのに。

「ああ、いーのいーの。  
覚えてるから。」

まず報告からっ」

翔子がそう  
何でもない事のように言ったから。  
ほっとした。

「あのね。」

敵を知らなきゃだから。

まずどういっかけて

真先輩と亜季サンが付き合い始めたかって

調べたのね。

やっぱり部活いっしょだからっての  
重要だったんだけど。

それでも

亜季さんのどこが良かったのかなあって  
考えてみて。

亜季さんとあたしって

何かタイプがことごとく…  
違うと思ったんだ

亜季さんって

どっちかと言うと  
大人しいって噂だし。

なんか？

あたしって…  
不利だよねえ…」

翔子は翔子なりに  
頑張って考えてるんだ…？

「でね。次よ。次。  
あたし。

陸上部のマネージャーに

なろうと思うんだ！」

はあ？

「そんな事書いたっけ？

あれ。

アンタ、テニス部はどうす…」

「辞めて来たさあ！」

「や、辞めたの！？」

凄すぎる。翔子。

「3年生はこれから引退するから。  
だから

これってチャンスだよね？」

そんな事まで考えて…。

「でね。」

灯にお願いがあるんだ」

「いいよ。」

何でも言って」

あんまり翔子がケナゲだったから。

もうどーんと来いって気になって。

あたしはそう言っただけだ。

「一緒にマネージャーになって！」

そのお願いに

あたしは天をあおいだ。



第16話 く陸上部・そして亜季さんく

「新しいマネージャーを紹介する」

あたしはジャージを着て。

翔子と並んで陸上部のみんなの前に立ってる。

だから。人前は緊張するんだって。

「1年2組 中村翔子です。

頑張りますので、よろしくお願いします!」

すらすらと翔子は自己紹介している。

おお!と歓声があがる。

翔子、可愛いからなあ。

あたしは傍で

「1年2組の日野灯です。  
…よろしくです…」

ちっちゃな声で言うと

「なにー？

聞こえねー」

と笑われた。

もー。

顔が赤くなってるのがわかる。

「赤くなっちゃって  
かわいー」

何か真先輩の声がしたような  
しないような…？

「こら。静かにして  
ひの あかり さんっていうのよ。  
この子。

私が色々教えてあげるからね。  
中村さんもね」

そう言つて。庇つて。

あたしの横でキレイに微笑んだのが…。

坂田亜季さん。

真先輩の噂の彼女さんだ。

で。

体育教師の秋山ちゃんが顧問だった。  
知らなかったけど

陸上で有名な人らしい…。

って。

うちの学校、陸上部。強かったんだ。  
知らなかったよ。

「まずは部室の掃除からね。  
1日で荒れちゃうから。  
結構大変よ」

亜季さんが掃除道具の場所と  
手順を教えてくれた。

「じゃあ、後よろしくお願いね」

そう言って。

亜季さんは部室を後にして。

部室には翔子とあたしの  
2人だけになった。

「さて。やるか」

腕まくりしてバケツと雑巾持って。  
掃除に取りかかる。

「あーん。

しょっぱなから  
真先輩の傍から引き離されちゃったよ。  
寂しー」

雑巾片手に翔子がボヤいてる。

「なんか…。

聞いた話だね。翔子」

「なに？」

「朝練とかあつて。

そういつのも出なきゃでね。

真先輩目当てのマネージャーって

思ってたより仕事がキツイから

けっこう辞めて行くらしいよ」

「げ」

翔子がへこんだ。

「ま、いっしょにガンバろ？」

「…うん」

ひととおり作業が終わって。

ふと。

部室の椅子に置かれた陸上雑誌を目にした。

開いてあったページ。

「真先輩出てるよ!？」

「なに、どれ？」

すかさず翔子が読み始めた。

「やーん。

やっぱカッコイイ…」

何のノロケですか。ソレ。

でも。

短距離でそんな雑誌に掲載されるくらい。

凄い人だったんだな。

真先輩って。

\*\*\*

何日か放課後にはすぐにマネージャーとして陸上部に通って。

暗くなるまで練習中に色々して。

練習とか見てたら。

凄いハードで。

何ていうか…。

運動たいしてデキナイあたしにしてみたら。

言葉悪いかもしれないけど。

バカみたいにみんな熱心で。

そんなね。

陸上で将来ご飯が食べて行ける人なんて  
限られてるのに。

何だか…

1分1秒のタイムで苦しんで。

それを上げるために

メニュー組んで。

取り組んで。

そういう人達がいっぱいいて。

なんで。

そこまで…って。

時々苦しいくらいに。

申し訳ないくらいに。

だからあたし。

裏方だけど。

そのお手伝いになるなら。

走れないから。

何でもやろうって。

素直にそう思えるくらい。  
人間ってスゴかった…。

「もう慣れた？」

救急箱の在庫チェックしたら、  
亜季さんが近寄ってきてそう聞いた。

「…はい。だいぶ」

ちよつと緊張して答える。

「中村さんは？」

「あ…。

さっき、ドリンク皆さんに配るために行きました」

「そう。真ね」

え？



「そういうコ多いからね。わかるの。  
不純な動機でも  
やるコトやってくれたら  
私はいいのだけど…。」

ちよつと見てたら気になってね。  
裏方の仕事だから。マネは。  
そういうの…  
もっと理解してくれたら、とね」

バレてますがな。  
翔子。

心臓がばくばくして。

「灯ちゃんは…  
どうも違うみたい」

違いますけど。  
付き合いですから、  
アナタの敵ですが…。」

緊張しながら聞いている。

「陸上。  
好きになってね」

そう言って。

亜季さんはあたしの傍から離れた。

……。

透明な、感覚。

何ていうか。

亜季さん。ただ大人しいだけとは違う気がした。

芯が、強い。

感じ？

あの人。

走る人が好きなんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9325f/>

---

ダイヤモンドの恋

2010年11月20日15時05分発行